知っておきたい
人間学のキーワード

# イスラーム復興
## Islamic Revival

藤本 透子（ふじもと とうこ） 民博 民族文化研究部

イスラーム復興ということばは、現代社会においてイスラームに則した生き方を求める運動を広く指している。この運動は世界各地でみられ、生活のなかで礼拝や断食などを重んじる個々人の活動から、モスクを建設しイスラーム教育を促進するといった社会的活動、さらにイスラーム法にもとづく国家の実現を求める政治的活動まで、多様なかたちをとる。

これらの活動の背景には、イスラームにのっとった社会が充分に実現されていないという、イスラーム教徒自身による批判的な認識がある。つまり、急激な近代化にともなって政治と宗教が分離され、かつてのようにイスラーム法を遵守する国家や社会は失われてしまった場合が多い。このため、アッラーのことばであるクルアーン（コーラン）や、預言者ムハンマドの慣行などの信仰の原点に立ち帰らなければならない、と考えられている。

このように書くと、イスラーム復興とは前近代的な社会を実現させようとする、時代錯誤な運動のように思われるかもしれない。しかし実際には、近代化の波をいったん経験した人びとが、近代化とイスラームを結合することであらたな社会を目指す動きである。一九七〇年代のイラン・イスラーム革命や、一九九〇年代の旧ソ連からの中央アジア諸国独立にともなうイスラームへの関心の高まり、さらに昨今の中東情勢など、イスラーム復興の潮流をふまえて理解すべき事象は多い。

それでは、マスコミでしばしば用いられる「イスラム原理主義」や「イスラム過激派」と、イスラーム復興とはどのような関係にあるのだろうか。イスラーム復興は日常生活のなかでイスラームの教えを実現しようとする人びとの幅広い運動を含むが、「イスラム原理主義」は「イスラム過激派」とともに、イスラーム復興のごく一部である急進的で武装闘争も辞さないような組織をさして用いられている。イスラームがテロとの結びつきで話題になりがちな状況は、穏やかにイスラームの教えを実現しようとする人びとの姿を見えにくくし、イスラーム教徒全般が脅威だという誤った認識を生みやすい。実際には、大部分のイスラーム教徒は急進的な活動に批判的だ。武装闘争をおこなう組織が形成される背景には、グローバルな経済や政治のゆがみが影響していることに、あらためて眼を向ける必要がある。

世界のイスラーム教徒の人口は約一〇億人にのぼっており、日本でもイスラーム教徒は遠い存在ではなくなりつつある。中東の宗教というイメージに反して、じつはもっともイスラーム教徒が多く居住するのはインドネシア、バングラデシュ、インド、パキスタンなどアジアの国々である。日本にも、これらの国々から移住したイスラーム教徒が多く暮らしている。多民族化するわたしたち自身の社会をより深く捉えなおすひとつのきっかけとしても、イスラーム復興は重要な概念といえよう。